

アリストテレスの構想論

——アリストテレスに於ける哲學の概念、二——

西 谷 啓 治

—

プラトンに於て單に感覺と臆見との混合と考へられてゐた構想 (*phantasia*) は (*vgl.* Soph. 428 A. B) アリストテレスの體系に於て初めて獨立の領域と重要な役目を賦與された。爾來、カントがこの概念の意義に一轉機を與へるまでは、この概念の歴史はアリストテレスの規定の支配の下に立つてゐたと言つてよい。例へば、デカルト、ホッブス、スピノザ等の思想のうちに働く *imaginatio* は、彼の概念規定の直接間接なる踏襲である。カントすらも、根本に於ては、この歴史から脱してゐないとも言へるであらう。然もこの概念は、それが認識論や倫理學乃至一般人間學その他に於て持つて來た極めて重大な役割にも拘らず、同時に最も曖昧な概念の一つである。而し

てこの不明瞭は既にアリストテレスに於ても現はれてゐる。それは一方では感性知覺と、他方では思惟と相接してその中間の限界領域を占め乍ら、然も其等との間に引かれた明確な境界線なしに、限界を超えて兩者の各々と絡み合つてゐるのである。

アリストテレスに於ける構想概念には、大體三つの意義が大別され得る。第一には、外感特に視覺に於ける現前現象である。第二には、この現象が偽である場合で、その時構想は假象を意味する。例へば夢とか幻覺とかに於けるものである。第三には、現象が外的感官に對するのではなくして、外感の對象の模像が心像として吾々の内に現前する場合であり、構想はそこでは大體表象を意味する。⁽¹⁾ 第一と第三の場合にはこの言葉は *phantasia* (現象する)と、第二の場合は寧ろ *phantasia* (外見をもつ)と結びついてゐると考へ得る。併し、それが此等の場合を通して *phantasia* といはれる以上此等に共通なる特質がなければならぬ。それは、*psyche* が感覺から一步自らの内へ退き乍ら然も未だ思惟の領域に立たず、いはゞ兩者の中間に動搖する状態であると思はれる。(第一の意味の *phantasia* でも、外感に現前するものが感覺する *psyche* に現前するものとして考へられてゐる時、即ち外感が暗々裏に、内なる世界に裏付けられたものとして考へられてゐる時、言へることであらう)。故にこの小論では、構想を、

主として感性知覺と思惟との間の中間性といふ見地から見て行かうと思ふ。その時、第一の問題は感性知覺と構想との關係(二)、第二は構想に獨自なる諸現象(三)、第三は構想と思惟との關係(四以下)である。

- (1) Freudenthal, 'Über den Begriff des Wortes *phantasia* bei Aristoteles' (1863), S. 15f. 參照。併(二)の區別は單に荒筋だけのものと思はれる。實際には構想はこの區別をばかして去るやうな融通性をもつ。例へば(吾々が思慮的に行動する際の企畫に含まれる構想の如く)、第三の場合の様に *reproduktiv* ではなく *produktiv* であるが、然も第二の場合の如く假象(*Schein*)の生産とはいへないやうな場合も考へ得るであらう。

二

De anima によれば、構想 (*phantasia*) とは「それによつて或る構想像 (*phantasma*) が吾々に發生するもの」であり、又「それによつて吾々が識別しそして眞理を得、又は僞に陥るところの能力又は状態 (*hexis*) の一つ」であるといはれる (De an. I, 3, 428^a 1, 3)。然るにかくの如き能力又は状態のうちには、感性知覺や判斷や直觀知なども數へられるが、構想は其等のいづれとも異なる。故に構想の意義の明晰判明なる限定には、第一に、構想像なるものが如何なるものと考へられてゐるかを見ること、第二に、その能力と他の諸能力との差異を指摘することが必要である。そのために吾々が依り得るアリス

トテレスの著作は、感性論の場合と同様、主として *De anima* 及び *Parva naturalia* の諸論文、特に『記憶と追憶に就て』や『夢に就て』等である。

- (1) この言葉の適譯を知らない。それは大體 *psyche* の *dynamis* が外からの働きかけに觸發されて現勢化し乍ら (*ἐν τῷ σφύρατι* *ἐστίν*, *ἐκδος* *καί* *ἐστίν* 等といはれるのはこの故であらう) その働きかけの去つた後もその *pathos* を又はその痕跡を把持し (例へば習性に於ける如く)、かくして *psyche* の状態を形成する時、その「把持」「状態」を (缺如態に對して) 意味するといつてようであらう。 *positive state*, *Habitus*, *Stand* (*Laibnis*) 等と譯されるのは、そのためと思はれる。併しこの「状態」は靜的な意味のものではなく、恒に新しき刺激によつて變動しやうとする傾向をもち、刺激への適應の力である所の動的なものである。 *disposition*, *Fähigkeit*, *disposition permanente* (*Hamlin*) 等の譯は、*πῶς* から來るのであらう。 *Metaph.* Δ 20 參照。

先づ、構想像が如何なるものであるかは、*Parva naturalia* に散見する言葉を綜合して大體次の如く解し得ると思はれる。曩に感性論のうちでも述べた如く、感能を通して「感覺する *psyche*」のうちに生じた運動は、恰も印形が蠟の上にその跡形を残す如く、感覺されるものの形相 (*eidos*) を感覺印象 (*τὸ αἰσθητικόν*) として *psyche* に残す (*De an.* B 12, 424^a 17 乃至 *De mem.* 1, 450^a 30)。この印象は、その際の現勢的な感覺が去つた後も感官のうちに——その表面にと同様にその底にも——残り、そして感官を動し續ける (*De somniis*, 459^b 5 及び 460^b 2)。かく感覺印象を内實とする運動が感官をその根

概まで動かし、現勢的感覺の終つた後もそこに残る時、構想像が生ずる。それは「感覺
 印象から生起した殘留的運動 (*ai' epínoiton katestas*)」である (ibid. 461^a 18 及び 461^b 21)。
 「外なる感覺對象が去つた後も感覺印象は止留し (*epiēveis*)、それ自身感覺されるもの
 なる」(ibid. 460^b 2)。[○] それ故構想は或は「一つの微弱なる感覺」ともいはれ (Rhetorica, A 11,
 1370^a 28)、「或はそれが「止留し」して感覺と同様であること」(τὸ ἐπιέπειν καὶ οἴωσις εἶναι ἀνάθη-
 ρεῖν) に就て語られ得るのであり、又後に述べる如く必然的に構想を含む記憶につ
 て、感覺の場合に於けると同じ様に、蠟に印せられた跡形の譬が適用されるのである
 (De mem. 1, 450^a 30)。[○] 然らば感官をその根柢まで動かすとは如何なる意味であるか。
 それは言ふ迄もなく特殊感能の根源としての共通感覺が觸發されることに外なら
 ない。即ち、一つの特殊感覺に於ける感官運動(その器官——詳しくいへばその器官
 と一體をなす感能——)の受取つた印象が、共通感能までも觸發し、その觸發に於て生
 じた質的變化の運動即ちその感能の *εἶδος* が初めの感覺の終止した後まで残る時、そ
 れが構想像である。故に「構想像とは共通感覺の *τάξις* であり」(De mem. 1, 450^a 10)「構想
 とはかゝる構想像又は表象の生産である。

併し乍ら、もしも共通感能が曾て述べた如くすべての特殊感能の根源であり、運動

大さ等の如き「共通的に感覺されるもの」に係り、甘く熱い「もの」白い動く「もの」等を知覺し、感覺や知覺に於ける作用の意識と自己意識又は *Befindlichkeit* ともいふべきものの能力であるとすれば、此等の場合に於ける共通感能の働きと、構想像がその *modus* であるといはれる場合の共通感能の役割との差別及び聯關が問題となるであらう。

兩者の差別は、上述の如く構想像が現勢的感能から生起した運動であり乍ら然もその感能の止んだ後に殘留するものであり、従つて感能との間に時間的經過を含むに反して、感覺は現勢的にはかゝる經過を含まずして現在の一點に成立し、然もその現在に於て恒に感覺されるものと一つであり、一つの現勢を成す、といふことから既に明かである。このことは一層立ち入つて言へば次の如きことを意味する。感覺に於ては感覺されるものの形相のみが感能に印象されるのであるが、然も感覺に現前するものは感覺される當のものである。(何となれば、感覺されるものの、感覺するものへの現前が、即ち形相を受取ること以外ならぬから)。故に感覺に於ては、印象された形相は形相として、は感覺されない。例へば或る人間の知覺に於ては、實際に感覺してゐた時には、主宰的なるそして識別する感能(共通感能)は感覺印象をコリスコスとは呼ばずに、この印象を通して斯の眞實の人間をコリスコスと呼ぶ (*De somniis*,

40, p. 24)。之に反して構想に於ては、psycheに現前するものはその印象自身である。感覺に於ては印象を通して、感覺され、然も感覺されるものは對象であつたが、今やその印象がそれ自身としてpsycheの前に置かれるのである。(構想はその限りに於て、殆んど所謂「表象」と呼ばれるものと同じものといひ得るであらう。) 兎に角、感覺に於てはpsycheが外向的であり構想に於ては内向的であるといつてよい。感覺は外的對象による特殊感能の觸發であつた。然もその感能が感覺することを得るためには、共通感能が、特殊感能の各々を根源的に見たものであると同時にすべての特殊感能の根源である如きもの、その意味で特殊感能の見地からいへばその各々のうちに於て根源的感能、力、そのものであり乍らそれ自身としては特殊感能のいづれでもないもの、更に換言すれば特殊感能の各々と一體をなし乍ら然も *Triebcharakter* に於ては別なるものとして、根柢に置かれねばならなかつた。而して特殊感能と共通感能とのこの即かず離れざる聯關によつて、前者が受動する、といふことが初めて可能であつた。即ち感覺に於ける受動即能動が成立し得た。⁽¹⁾ そこでは特殊感能は(特殊感能としては對象に對して受動的であり、共通感能は(それ自身としては)能動的であると言ひ得るであらうが、然もこの能動もかの受動と直接に一つであることに於て、かゝる

作用構造をもつた「感覺する psyche」は外向的である。即ち感覺は外のものの觸發によつて psyche の内に生起する。然るに構想に於ては、内に起つたその運動によつて共通感能が觸發される。そこでは共通感能が受動的である。(その際共通感能は言ふ迄もなく、曩に擧げた前の見地に於て、即ち特殊感能自身が根源的に見られたものとして、理解されてはならない。その場合には共通感能は感覺するものとして能動的である。これに反して、こゝではそれは寧ろそれ自身として、即ち特殊感能とは、*einmal* に別であるといふ見地に於て、見られねばならぬ)。扱て併し構想像が共通感能の *πίθος* であるといはれる時も、構想することがあり得るためには、恰も感覺することゝが特殊感能と共通感能との聯關から成り立ち得た如く、*πίθος* する能力が別になければならぬ。これが構想力に外ならない。勿論この能力の能動も、感覺の場合に於ける共通感能の能動と同様に受動と直接に一つである。何となれば、構想像は特殊感能の受動を共通感能(それ自身としての)が再び受動したものであり、構想力の能動もこの運動を内實にするものである。それは、自らの内に生じた運動を受理する共通感能の働きに外ならない。即ち、受動する限りの共通感能が構想力であるといひ得る(後の七八頁參照)。兎に角、感覺に於て特殊感能が外からの直接的な働き掛けに

よつていはゞ受動するものであり共通感能が受動するものとして一つの働きであつたのに對して、構想に於てはこの受動が更に *psyche* の内面へ移し入れられて共通感能が受動するものとなり構想力が受動するものとなつたことに於て、*psyche* の働きが外向的より一步内向的へ轉じたと言ひ得るであらう。曾て述べた如く、既に感覺過程すら營養過程に比して對象からの一步の距離を張り渡して成立するものであつた。然もなほ感覺が對象の働きかけを(即ちその働き掛けの内實である形相を)直接に受取るものであつたのに反して、構想に於ては對象との距離は更に一步擴がり、その働きかけは間接となる。感覺がなくなつた後に於てかの形相を構想像として現前せしめ得る働きも、この距離の故に可能なのである。のみならず、構想力は對象からの間接性の故に、對象の強引から自由となり、遊離し、場合によつては創造的ともなり得る。(併しこれは構想と思惟との關係を見る時に語るべきことである。)而してこの間接性遊離性の故に構想は、感覺が恒に眞であるのに對して、誤れるものであり得る、否、大抵のものは誤りである (*De an. I. 3. 428^a 11*)。夢や空想、幻覺や錯覺等の場合は勿論、正常なる意識に於ても、例へば直徑一呎の圓板としての太陽は感覺としては眞であるが、構想としては偽である。のみならず、抑々吾々が *phantasia* と言ふ

場合は、吾々の感覺がその對象に關して精確に働く時ではなくして、吾々がそれを明確に感覺しない時なのである (ibid. 12)。

(1) 共通感能に對するこの解釋については、拙稿「アリストテレスの感性論」(本誌第二百十一號)を参照。

感覺と構想との差別に就て今述べられたことから、兩者の聯關も既に大體明かである。構想像が、感覺對象による特殊感能の受動を共通感能が *psyche* の内面に於て再び受動して生じたものであるとすれば、それが感覺を離れては成り立ち得ないことは言ふ迄もない。「もし、或るものが動かされる時他のものがまたそれによつて動かされるとすれば、そして構想が或る運動であり、また感覺を離れては生ぜずして、感覺するものうちに、また感覺に係るものに係つて、生ずるものと考へられるとすれば、そしてまたかの運動が現勢的、感覺によつて生じ、そして必然的にその感覺と同様なものであるとすれば、此の「構想」といふ運動は、感覺を離れてはあり得ないもの、感覺するもの以外には内屬しないものであり、そしてその運動をもつものはそれによつて色々の能動や受動をなし得、そしてその運動は眞でも偽でもあり得る」(De an. I, 428^a, 10)。この箇所の最後に言はれてゐる色々の能動や受動及び其等が眞でも偽でもあり得ることは後の問題である。こゝでは、構想が感覺を離れてはなく、感覺と「同

様な] (*ôiautos*) のものであると言はれてゐることに注意すれば足りる(なほ七二頁参照)。
 更に、構想力が共通感能とよ *einai* に於て(存在論的見地からは)區別され得るものであり乍ら實際の活動に於ては(存在的見地からは)一體をなすといふことは、*De somniis* のうちに於て夢に關して次の如く言はれてゐることから明瞭である。「構想能力は感覺能力と同じものである。併し構想能力としてあることと感覺能力としてあることは別である (*τὸ δ' εἶναι φανταστικῆ καὶ αἰσθητικῆ ἕνεκα*)」 構想は現勢に於ける感覺によつて生じた運動であるが、夢も一つの構想であるやうに見えるから………夢見ることとは明かに感覺能力に、然も構想能力である限りの感覺能力に (*τοῦτου [τὸ αἰσθητικῆ καὶ φανταστικῆ] ἑνός*) 屬する[*op. cit.*, 459^a 15]。 (一) 感覺と構想とは現勢に於ては言ふ迄もなく別のものである。現勢としては、夫々がそのものとして見られる限りに於て、感覺は感覺であり構想は構想である。而してこの見地から能力を願れば感覺の能力と構想の能力とは *τὸ εἶναι* に於て(或は——存在性の異別は概念的分析に於てのみ顯はになる故——*τὸ νοεῖν* に) 別なものとして見られる。即ち器官の同一性にも拘らず、そのうちに於ける *psyche* に新しい機能が、換言すれば異つた種類の對象への係り或は新しい關係性又は態度が、現れるのである。(二) 然もまた逆に、この *εἶναι* の區別

にも拘らず、器官の同一性の故に、従つてまたそのうちに於ける自然的生命力 (Psyche) の同一性の故に、構想は感覺を俟つて、それとの聯關に於てのみ成り立ち得る。即ちそれは、特殊感能に於ける質的變化の運動が根本的感能にまで達して自らを完結することである。この見地からすれば、兩者の能力は生きた活動に於て不可分なる一體をなすものとして見られる。(三) 如上のことを總括的に見れば、一、つ、能力であり乍ら然も「概念」に於て別なる二つの働き方又は係り方をもつといふところに、構想に於ける共通感能の「生」があるのである。アリストテレスが「構想能力は營養能力や感覺能力等のすべてと *to eunai* に於て異なるものであるが、他方吾々が *psyche* の諸部分を離れ離れに分けて考へたとして、それが其等のどれと同じであり或は異なるか、といふことは多くの困難をもつ」といふ時 (De an. I, 9, 432^a 31) がかかることが暗示されてゐると思はれる。要するに、恰も感覺に於て、共通感能に、それが特殊感覺の能力として見られる一面とそれが特殊感覺の能力としてそれ自身に於て見られる一面とが區別され、そのことによつて感覺に於ける受動即能動が成り立ち得ると同様に、構想に於ても、此のそれ自身に於て見られた共通感能後の側面に再び受動的側面と能動的側面とが區別され、前者は本來の共通感能であり、後者は「構想能力である限りの共通感

能である」と考へられる。即ち、前者は感官内に於ける殘留的運動によつて觸發を受ける面、後者はこの觸發を構想像として *psyche* に現前せしめる面であり、然もこの兩面が受動即能動として一つであることに構想なる心的事實も成立するのである。而して如上の如き共通感覺の彙層的に多面的な役割のうちに、その「生」が、従つてその生の構造をなす感覺と構想との聯關が表示されてゐるのである。(1)

- (1) この受動即能動といふことに、構想が *psyche* の機能である所以がある。「*foundational*」の如く、構想の理論に於けるアリス・トテレンスの *materialistische Auffassung* のみを強調するのは (vgl. op. cit.)、受動が肉體の有機的過程に基くことのみを見て、受動が受動するといふ能動を離れてはなく、この能動性に於て構想も意識現象として成り立つといふ側面を看過するからに外ならぬ。

併し乍ら *psyche* が現に感性知覺や思惟に働いてゐる場合には、構想は影薄きものとして意識の表面から押し除けられてゐるのが常である。「日中には彼等は、感覺と知性とが共働してゐる故に押し除けられ又目立たなくされる。恰も、大きな火の傍で小さな火が、或は大きな快苦の傍で小さな快苦が目立たなくされるやうに」(D. somnits, 3, 460^b 32)。即ち *psyche* がいはゞ現在の感性知覺と思惟とを焦點としてそれへ集められる時は、構想は *psyche* に「潜勢的に内在するが、妨げてゐるものが解除されると現勢化する」のである (ibid. 3, 461^b 17)。構想は、感覺されるものからの間接性の故

に、現在の感性知覚への牽引又は收約から自由となる可能性をもつ。この可能性が現在に於て實現されるのは夢に於てであり、現在の前後へ何等かの範圍の時間的地平が切り開かれることによつて實現されるのは、記憶及び期待に於てである。故に此等に於て構想自身の独自の領域が開かれるのである。

三

吾々は曩に構想が共通感能に屬し、共通感能はこれによつて色々な受動や能動をなし得る、と言はれてゐるのを見た(七七頁)。夢も其等のうちの一つである。構想の廣大な一領域をなす夢は、『夢に就て』の論文によれば、感覺印象によつて感官の内に生じそして其處に殘留する運動が、覺醒時には意識から押し除けられ又はくまされてゐるにも拘らず、根本的感能としての共通感能が特殊感官との結合による現働の能力を羈束されて感覺的に無活動となる睡眠のうちに勢を得て、この共通感能を觸發し、自らをそれに現前せしめることによつて生ずる (De somniis 3, 460^b 28ff.)。即ち根本的感能が感覺される客體なしに、單に自己自體のみで、⁽¹⁾然も恰も客體によつてと同じ様な仕方⁽²⁾で觸發される結果である。かくして夢は、嚴密な意味での睡眠中に

生じた場合に於ける、感覺印象の運動による構想像」と定義されるのである (ibid. 3, 462^a 20)。

(1) 故に、知覺の再現としての表象や次に述べる記憶等に於ては *reproduktiv* (近世心理學の言葉を藉りれば、である構想力は、

夢に於ては *produktiv* であると言へる。覺醒時に於ても、例へば熱病に罹れる者、酔つた者、強い感情に動かされた者、*melancholisch* な者に於ても、構想力は夢の場合と似た働き方をすると考へられてゐるが、ここでは此等の場合には一々立ち入らない。

(2) アリストテレスは、睡りながら然も實際に或るものを臆げに感覺する等の場合を除いて、本來の意味で睡つてゐるといはれる限りの睡眠に現はれる構想のみが夢であるといふのである。

夢と同様に廣大なる領域に記憶と期待の世界がある。吾々は次に此等に於ける構想の役割を見ねばならぬ。先づ *Rhetorica* の快樂論(第一卷十一章)のうちでアリストテレスは次の如く語つてゐる。「快を感ずるとは或る *kosmos* を感覺することのうちにある。然るに *phantasia* は或る微弱な感覺である。そして記憶する者や期待する者のうちには、彼が記憶し又は期待するものの或る *phantasia* が伴ふ。もしさうであるならば、記憶や期待には同時に——感覺も伴ふのであるから——快を感ずることとも伴ふ」(ibid. 1370^a 27)。

併し構想と快樂との關係は、後に構想と欲求との聯關を考察する時の問題である。ここでは記憶と期待とのみを問題とする。先づ記憶と構

想とは如何なる聯關をなすか。

記憶に於ては記憶されるものは恒に構想像(或は表象)として *psyche* に現前するのであるから、記憶が構想の内屬する能力即ち共通感能に内屬することは明かである(例へば *Demem.* I, 450^a 22; 451^a 17)。併し乍ら、このことは記憶が直ちに構想であり記憶されるものが構想像であるといふことを意味しない。何となれば、構想は共通感能の *phantasia* として、觸發されたその感能のうちに現存する構想像を、恒に「今」に於て知覚するに反して、記憶は構想像を通して、この *phantasia* の源であるところの「曾て」知覚された對象を、今記憶するのである。然らば、現在直接には單にかの *phantasia* (構想像)の現前があるのみであるに拘らず、現前してゐない不在なるものをそれに於て記憶するとは如何にして可能であるか。この問題に對してアリストテレスは次の如く答へてゐる。かの *phantasia* は感覺印象、即ち感覺されたものの形相の跡形として一種の畫の如きものである。然るに畫板の上に畫かれた物は、その物(例へばコリスコスなる人間)であると共にまた「コリスコスの影像 (*eikōn*)」でもある。然も同じ一つのものであり乍ら兩方である。併し乍ら、兩者の *phantasia* は同じではなくして、それは或は當の物として、或は影像として、觀る (*theōria*) ことが出来る。吾々のうちの構想像もそのやうに

考へらるべきである。即ちそれはそれ自體に於て觀られたもの (*Deonoma*) であり然も同時に他のものの構想像であると考へられねばならぬ。然るにそれはそれ自身に於ては觀想像又は構想像であるが、他のものへの關係に於て見れば影像であり、かくしてまた記憶像 (*anamnastika*) である。それ故、そのうちに含まれた殘留的運動が現勢的である時、もし *psyche* がそれ構想像をそれ自體に於てある限りの見地で知覺するならば、それは或る直知されたもの (*noema*) 又は構想像である様に出現する如く見えるが、もし他のものへの關係に於ける限りの見地で知覺するならば、その時は、恰も畫のうちには畫かれたものを影像として觀る如くであり、そして實際にコリスコスを観ないでコリスコスの影像として觀る如くである。即ちこの場合にはこの影像として觀る觀想に含まれた *ideas* は寫生された物として觀られた時とは別であるが、同様に *psyche* のうちに於ても、一は單に直知されたものとして、他は、畫の場合の様に、影像であるから従つてまた記憶像である (*Ibid.* 450^o 21ff.)。而してもしも、アリストテレスがこゝで説明しやうと努めてゐる如く、感覺印象、即ち感能が感覺されるものから受取つた形相が、更に共通感能にまで傳はる時、その形相がその源である對象への意味志向を含むものとしてではなしに、それ自體に於てあるがまゝに直觀され直

知される場合、即ち「心眼に現前する」(De mem. 1, 450^a 3) 場合には、その *θεωρημα* 又は *νοημα* が本来の意味の構想像であるとすれば、そしてそれをかくの如き仕方では現前せしめる能力が構想力であるとすれば、かの形相が更に對象へ關係し返されるためには一應先づそれ自體に於て觀られねばならぬ以上、構想像が記憶のうちにもその作用の内實として含まれその意味に於て記憶を基礎付けるものであることは明かである。本来の意味での構想像と記憶像とを「像」と「影像」との區別とすれば、影像の現前は像の現前に基かねばならぬ。「記憶及び記憶すること」の定義として *φαντασματος, ὁσι-εἰκόνος ἢ φαντασμα, εἰς* (自らが由來するところのもの) の影像である限りの構想像の状態と言はれるのもこの故に外ならない (ibid. 451^a 13)。

今迄は吾々は便宜上ことさら敘述を感覺的なるものの記憶のみに限つて來た。併し乍ら言ふ迄もなく記憶には思惟されたものの記憶もある。アリストテレスによれば、知性も構想なしには働き得ず、その意味に於て、後に一層立入つて述べる如く、構想到「感覺的構想」と「思量的構想」の區別がなされるのであり、従つてまた思惟されたものの構想を基礎にした記憶もあり得るのである。併し、構想が原本的には感覺に由來し、思惟も構想を介せずしてはあり得ないとすれば、記憶も本來的には構想の能

力即ち共通感能に内屬し、單に傍ら思惟能力に屬すると考へねばならぬ。記憶の能力に關して、思惟されたものの記憶は隨伴的には思惟能力に屬するであらうが、本來的には第一の(根源的)感覺能力に屬すといはれ(De mem. 1, 450^a 11) また記憶されるものに關しても、構想である限りのものが、本來的に記憶されたものであるが、構想なしにはあり得ない限りのもの思惟されたものは隨伴的にさうである(ibid. 450^a 23)といはれる所以である。後にのべる如く、思惟は構想像に即しつつそれから純粹なる普遍的形相を看取することであり、従つて、思惟に於ては、この純粹形相が(思惟されたものとして)當面の對象となり、構想像は傍ら(隨伴的に)見られるにすぎないに反して、その思惟の記憶に於ては、この構造は再び構想の構造に還つて、構想像が當面の對象となり、思惟されたものは再び隨伴的位置をとると考へられる。(詳しくは後の五を參照)。

記憶が大體右の如きものであるとすれば、吾々は次には期待(ἐπιθυμία)に就て語るべきである。併し乍ら、記憶が過去のものに、感覺知覺が現在のものに係るに對して、將來のものに係るところの此の期待(De mem. 1, 449^b 27)に關しては、アリストテレスは何等の纏つた論述をなしてゐない。然も期待が記憶と同じ様に構想を含みそれに

fundieren されてゐることは、期待されるものが希望され或は危懼されるものとして構想のうちに現前せねばならぬ以上當然であり、またアリストテレスも實際かく考へたといふことは例へば「構想と結びついた期待」(περὶ φαντασίας ἢ ἐπιπέ)といふ如き言葉 (Rhet. B5, 1383^a 17) 又 De anima のうちの「思惟するものは psyche のうちの構想像や観念によつて、恰もまのあたり見るが如くに、未來のものを現在のものに關係せしめて比量し思慮する」(I, 431^b 6) 等の言葉を見れば明かであり、更にその實例を示す如き Rhetorica のうちの多くの個所例へば「勝利は快い。然も負け嫌ひの者にとつてのみならず、凡ての者にとつて。何となれば、その際は、優勝の構想が発生し (φαντασία γίνεσθαι) 凡ての者は多少なりにそれへの慾望をもつから」(A11, 1370^b 23) 又「憤りには復讐することと思量によつて思ひめぐらす故に、一種の快が伴ふ。即ちその際發生した構想、復讐動作の」は、夢のなかの構想のやうに、快を生ずるのである」(B2, 1378^b 7) 等に於ても繰返し構想の發生について語られてゐるのである。

(1) 尚 Rhet. A11, 1371^a 10 及びその稿七〇頁参照。

扱て、記憶と期待とに於ける構想の役割を見んとすれば、吾々は記憶に關しては構想と思惟(特に理論的)との關係へ、期待に關しては構想と欲求との關係へ立入らね

ばならぬ。何となれば、構想は、記憶のうちに働くことによつて感性知覺と認識とを媒介し、期待のうちに働くことによつて欲求とその對象とを結びつけるからである。なほ、そのいづれの場合に於ても時間意識が根本的前提であることが注意されねばならぬ。ここでは先づ構想と欲求との關係から初める。

欲求 (*hōpētis*) は一方では感覺と、他方では場所的運動と結びついて見出される。何となれば、欲求とは追ひ求め又は逃げ避けることのできる能力であるが、それらのことなしには場所的運動もあり得ず、又それらのこと自身は感覺なしにはあり得ないからである。欲求が動物(人間をも含めて)のみに見出される所以である。扱て、Dean. F. 10によれば、動物の行動の能動因として二つのもの即ち欲求と理性 (*nous*) とが擧げられ得るやうに見える。その際、理性といはれるものの中には構想も一種の思惟として含めて考へ得る。⁽¹⁾ 何となれば、多くの人は自分の認識 (*ἐπινοήματα*) に反して構想に順ひ、その他の動物に至つては思惟や思量 (*λογισμός*) なくただ構想あるのみであるから。ここで理性といふのは、或る目的に對する手段の思量をなす理性即ち實踐的理性であつて、思辨的(又は理論的)理性ではない。この兩者は別である。(何となれば、

後者が眞僞といふ様な實踐に無關係のものに、或は——もし眞僞をもよいわると呼ぶならば——端的によい又はわるいものに係るに反して、前者は或る特定の人にとつてよい又はわるいものに係るからである。ibid. I. 7, 431^b 10-12 参照)。扱て、實踐的理性と同様欲求もすべて或る目的に係る。何となれば欲求に係る所のもの(その目的)が實踐理性の出發點(*ἀρχή*)であり、この理性の思惟の終る所(*τὸ ἐσχατὸν*)が實踐の初め(*ἀρχή*)である。(即ち實踐理性はその思惟に於て、欲求の目的であるものから初めて、それを實現する手段、その手段を實現する手段、等々の系列を下り、現在直接に實現し得るものに終る。實踐はこの思惟の終りから初めて、かの思惟系列を逆に溯つて欲求の目的に達するのである。Metaph. Z 7, 1032^a 25ff. 参照)。故に、欲求されるものが運動を惹き起す原因である。(何となれば、それはそれ自身動くことなしに動かす、即ちそれが思惟され或は構想されることによつて動かすのであるから。De an. I 10, 433^a 11 参照)。また、かく欲求對象が能動因であることによつて、比量的思惟も、欲求對象がその*ποιεῖν*であるから、矢張能動因となる。理性ではなくして構想が運動を惹き起す原因となる時も、それは欲求を離れては惹き起さない。それ故に、理性や構想も能動因と考へられ得るにも拘らず、結局の能動因としては唯一つのもの即ち欲

求能力 (τὸ ὀρετικόν) があるといへる。⁽²⁾ 理性も欲求を離れては動かさないのである。何となれば、人が思量に従つて動く場合は意志 (βούλησις) による行動であるが、意志も一つの欲求即ち思量に従つての欲求であるから。(以上 De an. I 10, 433^a 10-26 に據る) かくしてアリストテレスは、プラトンによつて、psyche の思量的(理性的)部分のうちに於ける「意志」と、非理性的部分のうちに於ける「氣概 (θυμὸς) 及び「慾望」(ἐπιθυμία) とに三分されたものを「欲求」のうちに綜合したのである(例へば De an. I 9, 433^b 5; B3, 414^b 2)。

(1) このことに就ては後に述べる(一〇六頁)。

(2) 併し、欲求を更に分けて考へれば、欲求能力に對して欲求對象が能動因となる。「能動因は一つ即ち欲求能力そのものであり、寧ろ窮極的には、欲求對象である」(Ibid. 433^b 10)。欲求對象は「動かすもの」であり、欲求能力は「動かされる」で動かすもの」である(433^b 16)。

かく動かすして動かす欲求對象は「實踐的なよいもの」(τὸ πρακτικὸν ἐπιθυμῶν) である (Ibid. 433^a 29^b 16)。^o このものは非理性的な慾望に對しては、快を與へる感性的事物である。感覺がある者には快と苦があり、従つてまた快き又苦痛な事物がある。そして此等がある所にはまた慾望もある。何となれば、慾望は快きものへの欲求であるから「(Ibid. B3, 414^b 4. 又 B2, 413^b 23)。^o 故に、感覺と快苦と慾望とは本質的に聯關してゐる。「感覺することは、單純なる直言又は直知の様なものである。併し對象が快く又は不快で

ある時は〔感覺する *psyche* は〕一種の肯定又は否定をするかのやうに追求し回避する。快又は不快を感ずるとは、よい又はわるいもの(かかるものとして見られた限りの)に向つて、感覺的中を以て働く(*energeia*)ことである。このことがまた現勢的な回避と欲求である。そして欲求能力と回避能力は互ひに異なるものではなく、又兩者が感覺能力と異なるものでもない。併し彼等の *enou* は別である(七八頁參照)(*T*, 431^a 8ff.)。然るにかかる慾望は、思量(*λογισμός*)に反して吾々を動かし、かくして思量に従ふ「意志」と相反對する(*T*, 10, 433^a 25)。^① かゝる「理(*λόγος*)と慾望との反對」は、欲求間の反對であるが、それは「時間の感覺をもつ存在者のうちにのみ生ずる。何となれば、理性は將來のことのために抑制するやうに吾々に命ずるのに、慾望は目前のことに動かされるからである。即ち、目前の快き事物が、將來のものを見ないために、絶對的に(或は本然的に *κατά φύσιν*)快くまた絶對的によいものとして現前する(*παύσηται*)のである」(433^b 7-10)。

(1) かりに直言と譯した *κατά* (或は *κατά*) は、分別的思惟としての判断即ち肯定(*κατάφασις*)や否定(*ἀποφασις*)と區別されて、直觀知と同じものである。即ち直知されたものの單純なる(そのままの)言表である(*Μετaph.* 9, 10 參照)。

(2) これについては本誌第二百九號の拙稿四八頁以下を參照。

ここから慾求と構想との關係が理解され得る。即ち、理性が思慮分別を以て欲求

を導くのに、無分別な欲望には目前のものが絶對的によいものと見える(構想される)のである。この區別に、欲求對象が思惟され又は構想されることに於て能動因となると言はれたこと(八九頁)が對應する。即ち對象が「善か現象的善善と見えるもの」か「 $\tau\acute{o}$ *epithorou* η *\tau\acute{o} *phantomenou* *epithorou*」の區別である。前者は、欲求に際して毫も妄想を雜へない理性の思慮を通して捉へられる絶對的な(或は本然の)善であり、後者は、構想に於て本然的によいものと見えるものであり、従つて間違つたものであり得る。「理性はすべての場合に正しいが、欲求や構想は正しいこともあるし正しくないこともある。それ故に、動かすのは恒に欲求對象なのであるが、これが善か或は現象的善かである」(433^a 26)。即ち、人が夢や熱病等に於てその理性を構想によつて覆はれる様に、欲望や憤り(*thymos*)が強力であり従つて快苦やその他の諸々の感情(*pathos*)に於て動かされすぎる時には、理性は同様に構想によつて暗まされるのである(De an. I, 3, 429^a 7, De mem. 453^a 19)。何となれば、欲望が志向するところの感覺的事物による内感の觸發(*pathos*)は、一面では想構像であり一面では感情であるから。*

(1) この區別に就つては Eth. Nic. I 611^a 13 ff. 参照。

併し欲求に關係しての構想の役割は、欲望に對して目前のものを善として現前せ

しめることだけに止まらぬ。後に述べる如く、思惟も構想を離れては爲され得ず、理性も、將來のものが構想として現前せしめられることなしには、それに就て思ひはかることは出来ない。對象が現に感覺されてゐる場合には、それが快いものであるか苦痛なものであるかに従つて、追及され或は回避されるが、將來のものに關しては構想が感覺の役目をする。「思量する *psyche* にとつては、構想像が恰も感覺印象の如き役をする。そしてその *psyche* が其等の構想像をよいと言つたり又はわるいと否定したりする時、それは回避し追求する。 *psyche* が構想像なしには決して思惟しないのはこの故である」(De an. I, 431^a14)。然もその時「思惟するものは心のうちの構想像や觀念によつて、恰もまのあたり見るが如くに、未來のものを現在のものに關係せしめて比量し思慮する。」而してこの思慮の決着した時に、恰も感覺の場合に對象が快いものか不快なものか決められた時と同様に、かの未來のものを追及し又は回避するのである (ibid. I, 431^b1-10)。而して思慮の素材となる諸々の構想像がそれに自由に驅使されるためには、彼等はいはば思慮の活動のうちに消化されて行つて、單に感性的な構想像とは異つた性質のものとならねばなぬ。構想は所謂「思慮的構想」となるのである。「動物は欲求をなし得る限りに於て自らを動かし得る。併しそれは構

想なしには欲求をなし得ない。そしてすべて構想は思慮的か感覺的かである。後者は人間以外の動物も分有する (Ibid. I 10, 43^b, 27)。後者は慾望に、前者は意志に含まれる構想であることは言ふ迄もない。(思慮的構想に就ては後に述べる)。更に、思慮の素材としての將來のもの、の構想は、それが思慮に對する素材として感覺の役目をなすことから既に明かなる如く、單なる構想として見られる限りに於て、感覺と同様に快不快を伴ふと考へることが出来る。(その事は、曩の *Rhetorica* からの二三の引用を見ても明かである。八七頁)。唯、その際は理性が思慮に於て構想に従はず反つてこれを支配することが出来るのである。——併し、快と欲求及び兩者の關係は、今迄觸れたよりもなほ一層深い根柢から見られることが必要である。何となれば、其等はアリストテレスによれば、動物の(特に人間の)存在性そのものの根源的構造のうち根差し、従つて其等の本質は結局其處から見られねばならぬからである。同様に善と現象的善との區別の充分なる考察も、人間の實踐の本質の分析を、従つて人間自然とその最高善への展開の究明を俟たねばならぬ。何となれば、萬物はその自然の本性に従つて行動する限り、究極的には、永遠にして神的なるものを目的としてそれを欲求し、従つてかかるものの欲求が萬物の存在性そのものの最も深い根柢に根

差してゐるのであり (De an. Tr. 415^a 1) 然もかかる欲求の實現は人間に於てのみ可能と考へられるからである。併し此等のことは既にこの小論の範圍を超えて、アリストテレスの倫理説の問題に屬する。

次に、記憶に於ける構想と思惟との關係が問題である。そのためには、記憶に於ける時間表象から出發することが必要である。「人が或るものを觀たとか聞いたとか理解したとかいふことを現勢的に記憶する時、人は恒に『以前に』といふ知覺を併せもつ。然るに以前と以後とは時間のうちでの區別である」(De mem. 1, 450^b 19)。「記憶は時間を含む (*meta chronou*)。それ故動物のうち時間を知覺する限りのものが記憶する。然も時間を知覺するその同じ能力(共通感能)によつて」(ibid. 1, 449^b 28)。即ち記憶は直接の時間意識である。或ものを記憶するとは、そのことに於て同時に時間の意識が生ずるといふ仕方(に於てのみ)可能である。記憶が *meta chronou* であるとは、記憶表象のかかる時間的性格を言ひ表はす。然らばかく直接に(勿論內的に)知覺された時間は如何にして計られる時間に關係するか。アリストテレスは「想起」(*anamnēsis*)に就て語りつつその事に言及してゐる。(その興味ある一節は一般に感覺と構想と

の聯關を視はしめる實例としても示唆に富むものである。彼によれば、想起とは記憶の系列を経て最後の記憶——想起さるべき知覺や知識の記憶——に到達することである。抑々記憶は、人の内面に潜勢的に、運動(記憶の現勢としての)を惹き起す如きものが存在することを前提する。記憶の系列とはかかる運動が現勢化されて次の運動を惹き起し行く過程である。⁽¹⁾然もこの過程は、人が彼自身の内面から、然もかの運動系列を含むものとしての彼自身の内面から、動かされることを意味する。而してかく潜勢から現勢への轉回のいくつかを経て目指された最後の記憶が現勢化することが想起である (De mem. 2, 452^a 10ff.)。扱て、想起に於て「最も重大なることは時間を知る (*γνωρίζω τον χρόνον*) べきことである」(Ibid. 452^b 7)。何となれば、吾々は想起に於ては現在と想起される過去のものとの距りの大小を、可測的な明確さを以て又は無限定な漠然さを以て、識別し得るから。然らばこの識別は如何なる仕方であるか。アリストテレスは、空間的な大きさを識別すると同様にして、と答へる。遠方にある大きなものを *noēō* する(觀想像或は構想像に依つて思量する)のは、思量する知性 (*διάνοια*) のうちに外のものと「同様な」*ὁμοία* 七八頁參照形や運動があるからである。此等の内的なるものはすべて外的なるものよりは小さいにも拘らず其等と「同様な

るが故に比例的である。而してかの思量は、思量するものの内なるこの「比例的な運動」によつて (*τῆ ἀνάλογου κινήσεως*) なされるのである。然るに、諸々の外なるものの「形相」に對して他の比例的なるものが内に考へられると正しく對應して彼等の空間的距離に對しても比例的なるものが考へられる (*ἰδιότῃ*)。而してこの二つの比例關係は同時に生ぜねばならぬ⁽²⁾。そのことによつてのみ、距離るもの大きさの思量が可能なのである。時間に就ても同じやうに考へられる。即ち、以前經驗された諸々の事物や出來事の「形相」と、此等に對應する所の構想としての運動との間に、また彼等の時間的距離と此等に對應する運動との間に、比例的關係があり、然も構想の世界に於ける二つの内的運動が結合されることによつて、かの事物や出來事が客觀的時間系列のうち、に一定の位置を與へられるのである。「對象に對應した「内的運動」と時間に對應した「内的運動」とが同時に生ずる時、その時人は現勢的に記憶する」。もし兩者のいづれかが他から離れて生ずるならば、記憶は起らない (*ἰδιότῃ* 及び 30)。この讀み難い個所の暫定的な解釋を試みれば、アリストテレスは一方では經驗された諸々の事物や出來事の系列とそれ等の analogon としての「形相」の想起運動に於ける系列を考へ、他方では、前者に刻みつけられてゐる(そして結局は天體の圓環運動に基

く客觀的時間の analogon が想起運動に刻み込れてゐると考へて、想起過程が Γ から Δ を經て Θ に行く時、もしそれに對應する客觀的時間系列に於て $\Delta \Gamma$ が知られてゐるとすれば、 Δb , $b c$, ΔB , の三つから ΓC が知られ、かくして Θ が客觀的時間系列のうち位置付けられると考へたと解し得ないであらうか。兎に角、本來の意味の記憶(想起ではなし)には時間的性格のものであり乍ら、然も未だ時間の直接的意識である。それが共通感能に内屬すると考へられる所以である。勿論共通感能は時間的『前後』の直接的識別をなし得る。これなくしては記憶も期待もあり得ないであらう。併し、その時間的前後の『大、小』の計量的識別はそれの力に屬さない。アリストテレスは今問題とされてゐる節の初めに「それによつて時間のより大より小を識別する或る能力があるといつてゐるが(452^b 8)その能力がすぐ次に出て來る思量能力(Sekundar)を指すことは、同時に νοεῖν, νοητῆς 等の言葉が屢々用ひられてゐる所から、又周知の如く Physica (IV, 14, 223^b 23) に於て時間計量の能力としての(従つて可測的時間認識の能力としての) νόσς⁽⁴⁾ に就て語られてゐることから明かである。實際アリストテレスは Physica に於て (IV, 11, 219^a 22) 又 I 2, 220^b 21 等)と同様こゝでも彼に常である注意深さを以て「時間を知る」(γνωσκῆσαι)といふ言葉を使つてゐるのである(九六頁參

照。外に例へば「時間の分量を知る」*γνωρίζωσι τοῦ χρόνου τοῦ ποσού*。De mem. 2, 452^b 4 等⁹⁾。周知の如く *Physica* に於ては「時間は前後といふことに關しての運動の數」として定義され、その場合の數といふ言葉は「それによつて數へるもの」ではなくして「數へられるもの」或は可數的なるものとして限定されてゐる。即ち、抽象的な數ではなくして、運動そのものに即した、いはば運動のうちに刻み込まれてゐる數といつてよいであらう。⁽⁵⁾ その故にまた、一方では運動が時間によつて計られると共に、時間が運動によつて計られる。然も「かかる事の起るのは當然である。何となれば運動は、距離の」大さに伴ひ、時間は運動に伴ふからであり、この事は其等が分量であり連続的であり可分的なるものであるからである。即ち大さが此等の性質をもつたものであることによつて、運動もさうであり、運動がさうであることによつて、時間もさうである」(ibid. 220^b 24)。併し、運動が距離の空間的大きさを張り渡すといふことに基いて運動のうち刻み込まれる時間は、客觀的時間或は時間の客觀的側面であり、これには主觀的側面が對應する。何となれば、數へるものがあり得ないならば數へられる如何なるものもあり得ず、従つて明かに數もあり得ない」からである (ibid. 14; 223^a 23)。而してかかる「數へるもの」が *psyche* 又は *psyche* の *nous* である。然るにこの *nous* が數へる時、それ

は曩に述べた如く、構想の世界に於て客觀的時間に對して analogisch なるものによつて、想起が、諸々の外なるものの生起系列に對應する構想像(即ち記憶像)の系列を辿ることを通してのみ、數へるのである。時間はこの客觀的、主觀的兩面は、數へるものと數へられるものとが相離れてはあり得ないといはれる以上、相互に內的に聯關して、時間の本質を構成する筈である。併しこの兩面の深い統一はアリストテレスに於ては明かに説かれてゐない様であり、また時間の問題に於ける最も究極的な難所である。併し、もし nous 又は diánoia を嚴密な意味で「數へるもの」とすれば、上記の「それによつて時間により大より小を識別する或る能力」とは、純粹な nous 又は diánoia ではなくして、後に述べる如き、いはば構想と癒着した限りのそれ、或は(反面から見れば)所謂思量的構想を指すとは云へないであらうか。運動を知覺するのは共通感能であり、運動の時間的前後を知覺するのは記憶、即ち共通感能の構想的働きの一つであり、前後のより大より小を計量するのは想起に働く思量的構想であり、より大より小を數によつて限定するのは、思量する知性そのものである、と考へられないであらうか。もしこの私解にして大過ないならば、「前後に關しての運動の數」といふ時間の定義も比較的明かにされ、他方時間意識に於ける感覺構想、思惟の層位的と同時に相互透入的

に對應する *analogon* として *psyche* に生じた運動(即ち構想像)であることは明かであり、その事はまた次に、對象に對應する運動と時間に對應する運動が「同時に生ずる」といはれてゐることからも推知される。空間的距りの思量から推して時間的距りの思量を考へやうとするのがこの邊の所の目的である。

(3) 併し、精密にいへば、純粹なる *dianoia* ではなくして、構想と結合する限りの *dianoia* であらう。そのことに就ては次に述べる。

(4) *Physica* のうちで「前後といふことに從つての數」としての時間を計量し得る能力と考へられてゐるこの *noēs* がここに言はれる *ekavoura* と同じものな意味するのは勿論である。周知の如く *noēs* (及び *noēōtes*, *noētē*, *noētia* 等) が廣義に用ひられる場合には、狹義の *noēs* (直觀的知性) と *ekavoura* (比量的知性) を包括する意味をもつ。

(5) このことから、運動以外の諸物にとつても「時のうちにある」ことが「彼等の存在性が時によつて計られる」ことを意味し (*Ibid.*, 221a 4ff.)、從つてまた彼等が生滅的なるものであることを意味する (221a 29)。ここから、アリストテレスが此處でいふ「數」と所謂「命數」の概念との類似を見ることは出來ないであらうか。

共通感能(從つて本來の意味の記憶の能力)と想起の能力との相違は更に次のことから明かである。すべての動物は感覺し得る故にまた共通感能をもつ。「感覺的構想」も彼等に屬する故に(例へば *De an.* I, 1, 434^a 5)。その能力即ち「構想能力」である限りの感覺能力(七八頁)も同様である。然るに構想が時間的性格のものである時、かゝる「記憶」は勿論前述の如く矢張共通感能に内屬するものであり知性の機能ではないのであるが、然も最早すべての動物に屬するものではない。「すべてが時間の知覺を

もつのではなく」(De mem. 1, 450^a19)「動物のうちただ時間を知覺する限りのもののみが記憶する」(ibid. 449^b 29)のである。更に「想起に至れば、それに與かるものは、人間以外に、既知の動物には何もない」(ibid. 2, 455^a 9)。「その理由は、想起することが一種の推理 (ανολογιασμος τιν) の如きものだといふことである。何となれば、想起せんと努める者は、彼が以前見た或は聞いた或は何かその様な體驗をしたことを推理する。そしてこれは一種の探究 (σπρησις) の如きものである。然るにかかることが、また思念する能力 (ἐν Βοηλευτικῶν) をも具有する如きものにのみ屬するのは自然である。何となれば、思念することも一種の推理であるから」(ibid. 430^a 10ff.)。こゝに syllogismos といはれるものが嚴密に論理的な推論ではなくして、記憶より記憶への閉合的自己内還歸の展開を指してゐることは言ふ迄もないであらう。アリストテレスはこれを説明して「πῶδος は肉體的であり、そして想起はかゝる πῶδος のうちに於ける、構想像の探究である」といつてゐる(430^a 14)。その意味は、思ひ出さうとする努力は恒に肉體的情感を惹き起し、人はこの情感に驅られて、忘れたものの心像を回復しやうと探す、といふことである。吾々はまた嘗て、運動系列を含むものとしての自己自身の内面から想起過程が發動するといはれたことを(九六頁)この syllogismos の自發自展に結びつけて

考へ得るであらう。(2) 兎に角、曩に想起が單なる(内部)知覺の立場ではなくして *synapsis* (知る)の立場であるといはれ、今それが一種の思念 (*Bothaneus*) であり又一種の *sylogismos* であるといはれたことは吾々の注目に價する。何となれば、このことは更に、既述の如く *De mem.* に於て一般に記憶が本來的には共通感能に屬し、思惟能力には單に隨伴的に屬するといはれ(八六頁)また *De anima* に於て構想力に感覺的構想力と思念的構想力の區別(後を見よ)が考へられてゐることと聯關するからである。思念的構想力といはれてゐるものが、想起に働く「思念する能力」と一つのもの乃至は一つに癒着せるものであることは *De an.* I. 11 に於て前者が思量する動物(即ち人間)にのみ屬する (*ἐν τοῖς λογιστικαῖς*) ものとして感覺的構想力から分たれてゐることからも知り得るであらう (I. 143^a 7)。吾々は曩に欲求のうちで、よいものと「見える」目前のものへの慾望と思慮分別を含む意志とが區別され、その各々に含まれる構想も二種に考へられるのを見た。*De an.* の今の個所に於てもこの區別が説かれ、その理由として、感覺的構想と思慮的構想即ち多くの構想像から唯一の構想像を作る構想が區別され、然も「低い諸動物が(感覺的構想をもち乍ら)臆見 (*δόξα*) をもたないと思はれる理由はここにあり。即ち、彼等が *sylogismos* から來る構想をもたず、然もこの構想は臆見を

もつからである。それ故欲求(こゝでは慾望)は思慮的構想をもたない」といはれてゐる(434¹off.)。こゝの syllogismos が De mem. の syllogismos と同じものであることは明かである。——かくして吾々は構想の能力としての共通感能が自己の内面に向つて幾段かのより高き機能を包藏してゐることを見ることが出来る。共通感能はそれ自體としては感覺によつて psyche のうちに生じた殘留的運動即ち内的 *ψυχοσ* を受取るものであつた。然もその時受動する能力は既にそれ自體に於ける限りの共通感能ではなくして「構想能力である限りの」共通感能即ち感覺能力と生きた一つのものに癒着してゐる構想能力であつた。更に記憶現象に於ては、共通感能はかの *ψυχοσ* 受容に含まれる時間性を直接的に意識し、かくしてまた意識に時間的地平を開くものであつた。記憶による過去と現在との結合は、内實的に見れば、曩に記憶がかの *ψυχοσ* を外的なるものの影像として再びそのものへ關係し返すと言はれた事に外ならない。想起現象に至れば、最早構想能力は感覺能力との癒着を脱して反つて思惟能力と連契する。即ち思量的又は思念的構想力である。然も想起が結局一つの現勢的記憶に歸着する如く、この構想力も既にそれが構想力であるといふことに於て、飽くまでも共通感能との聯關を斷ち切り得ない。もし全く聯關がなくなるならば、思

惟能力も思惟し得ないであらう。何となれば、後に述べる如く、思惟は構想を通してまた構想を以てのみ働き得るのであり、かく構想に即して働く限りの思惟能力が、即ち構想力と思惟能力とが一つに癒着して働くものが、かの思念的構想力と呼ばれるものに外ならず、従つて、恰も感覺的構想力が感性知覺と思念的構想力との楔として成立つ如く、思念的構想力は感覺的構想力と思惟との楔として成立つと考へ得るであらう。故に結局、感性的と同時に思量的の兩面をもつた構想力が思惟と感覺との兩端を結ぶものといつてよい。「構想は感覺とも思惟とも異なる。然もそれは感覺を離れてはなく、又判斷も構想を離れてはなく」(ibid. 427, 14)。構想が時としては、一種の思惟と考へられると言はれ (De an. I 10, 433^a 9) また逆に思惟が一種の構想とも言はれるのも (ibid. Ar. 403^a 8) 上述の如き兩者の生きた聯關によるのである。もし以上の如く解釋することが許されるとすれば、古來アリストテレス哲學の霧深き分野として不明瞭を難せられる「構想」が、實は理路一貫した、然も生きた *psyche* の自然に即した分析を含むことが見られないであらうか。

(1) この情感の生起する肉體的部分は、「感覺能力が宿る局所」[De mem. 2, 363^a 21]であるが、アリストテレスは諸々の感覺と感情との中樞即ち共通感覺器官を心臓と考へた。(本誌第二百一十一號拙稿八一頁參照)。

(2) 想起過程が潜勢より目的の現勢に到る運動であるとすれば、この運動を最初に惹き起す出發點がなければならぬ。それを介

して想起の運動が起される所のこの初め(ἀρχή)はアリストテレスによれば、現在考へてゐるものか或は同時に考へたもの、或は想起されるべきものに類した又は反對な又は接続したものである(De mem. 2. 45^a 18^o)。併し「一般には系列上の凡ての點の『中』が『初め』として適してゐるやうに思はれる」(Ind. 42^a 17^o)。同となれば、「中」より出發すれば、反對の兩方向のいづれへも赴き得る。然もそのいづれへ行つても、その一々の點に於て恒に、同じ方向に於てそれに接続するもの及び反對の方向に於てそれと對應するもの、従つてまたこれと接続するものへ赴き得るからである。而してかく想起過程に於て「中」が出發點と考へられることは、論理的思惟過程としての純粹な「推論」に於て、媒語即ち「中」が實體として推論の出發點(ἀρχή)と考へられてゐることに對應する。即ち想起過程が一種の *stillosimos* といはれる所以である。

(3) この譯は Hicks に由る。

かくして吾々には、構想と思惟との聯關の一層立ち入つた説明がこの小論の最後の問題として現れる。併し乍ら、その前になほ、構想に於ける自己意識或は寧ろ *Refindlichkeit* に就て一瞥しなければならぬ。吾々が既に感性に關しても考察したこの *Refindlichkeit* は、一般的にいへば *psyche* の實存そのものに於ける本質性ともいふべきものである。*psyche* はそれが係る客觀と共に一つの現勢に入ることによつて、客觀を知ると同時に自らを知る。⁽¹⁾ この二つの知が一つの構造聯關をなすことが *Refindlichkeit* の意味とすれば、それは、實存そのものに於ける本質性として、吾々の本來の課題であるアリストテレスの哲學概念の解明へ導く道の里程碑をなすものである。扱

て、吾々は嘗てアリストテレスの感性論に於て、外部知覺は必ずその成立つ場ともいふべき内部知覺を伴ひ、これは更に直接なる自己意識に裏付けられ、然もこの三者が動力的構造聯關をなして同じ一つの作用を組成する時初めて、知覺するといふことも成立ち得る、といふことを見た。psyche が現在の感覺への收斂から解放されて時間的地平をもつて現れて來た構想の領域に於てもかかる作用意識や自己意識があるといふことは、感性の領域に於て其等のものの能力であつた共通感能が(少く共それが構想能力である限りに於て)此處でも矢張支配するといふことから既に推察され得る筈であるが、それ以外に、なほ吾々はアリストテレスの諸書に散見する言葉からそれを確めることも出来る。例へば、先づ記憶に關して、それが恒に作用意識を舍んでのみ成立つことが明瞭に語られてゐる。「物に對應する運動(psyche のうちの)と時間に對應する運動とが同時的に生ずる時、人は初めて現勢的に記憶する。もしさういふことをしないのにすると考へるならば、彼は記憶すると考へる。何となれば、誤つて記憶しないのに記憶したと考へることもあり得るから。併し乍ら、現勢的に記憶した者が然もさう思はず、或ものを記憶し乍らそれを自ら意識しない、といふことは有り得ない。何となれば、記憶するとは、記憶するといふことを記憶すること

であつたから」(De mem. 2, 4^o 2^a, 23 ff.)。即ち感覺の場合と同様に、記憶する働きは、自らが記憶するといふことの直接的意識(即ち過去の經驗が現在の意識に上つて來たといふ意識)を伴ひ、この意識に裏付けられるといふ聯關をもつてのみ起り得る。而してかかる聯關があるといふことが、記憶の働きに「明白」の意識が含まれることに外ならない。(併し勿論そのことは、記憶作用に於て、記憶される當のものが第一次的意識内容、即ち *modus rectus* に於ける作用の志向的對象であり、作用の意識従つてまた自己意識は第二次的に *modus obliquus* に於て成立つ、といふことを妨げない。

- (1) ここに「知る」といつたのは、思惟のみならず、感性知覺や構想をも含めて廣い意味に於てである。アリストテレスに於ても同様な廣さを以て用ひられてゐる場合がある。(Met. an. 700b 18°)

のみならず、この事は、一種の *sylogismos* であるといはれる想起の場合に一層顯著ではないであらうか。何となれば、證明の方法としての純粹に論理的な推論は、思惟が思惟されるものと相即して、そのものの必然的展開を展開させることによつて自身自覺的となる過程である。(推論の定義はそのうちに於て、もし或るものが定立された場合彼等が外ならぬ彼等であるといふことから、彼等と異つたものが必然的に生起する、といふ如き *logos* と言はれる。An. pr. I, 1, 24^a 18°)例へば「ソクラテスは不可死

であるといふ「判断」は、ソクラテスが「人間」を實體とし可死的がこの「人間」に固有なる屬性であることによつて可能である。即ちその判断は實體「人間」を媒介として成立してゐる。即ち「概念」としては、ソクラテスの實體性としていはば個別即普遍なる「人間」が、かの判断に於ては、一方では個別に結びつくものとして、「ソクラテス」は人間である。他方では一層普遍的なるものに結びつくものとして、「人間」は可死的である。いはばこの兩方向の間に未展開のまま動搖し乍ら、背後に含まれてゐる。故にもしこの二方向の結合が定立されれば、必然的に結論が生起する。この「人間」の媒介性を顯出せしめ、判断の根柢に藏されてゐるかの二方向の結合を前提として定立し、かくして判断を根據付ける如き「*opsis*」が推論に外ならない。故に推論の意義はかの媒語「上」の例に於ける「人間」を顯はにすることにある。一方では媒語の導入によつて判断が解體されて推論運動が起り（前にも觸れた如く媒語が實體として推論の「根源」になるといはれる所以である。）他方ではこの運動の結着に於て初めて媒語は、展開された推論組織のうち、理由づけ根據を與へるものとしての自身を顯はにするのである。故に、推論は判断に恐らく既に概念に（含まれる可能性が展開されることによつて思惟と思惟されるものと）が自らに歸る運動に外ならない。もし推論の意味をかく解し得

るとすれば、かく思惟が、思惟されるものの展開に於て展開された凡てを包括し、即ち自らを具體化し充實しつつ自らに歸り着く時、そこにはすべての自己歸着(自覺性)の標である「明白」の端的なる意識があるべき筈である。この意識は自らの運動(作用)の及びその運動の全體の統一としての自己の意識である。而して運動に於て展開された凡ての要素が包括されて來るのも、この意識によつてである。と同時に明白の意識は、其等の要素の分枝化され乍ら秩序付けられた體系を自らの「根據」として成立つのである。然るに同じ事情は想起に於てもあり得る筈である。何となれば、人が記憶系列を、彼自身の内面から發動して來る所の(九六頁)潛勢より現勢への轉回といふ運動のうち、に經過しつつ、自ら指す記憶へ歸着する時、人は經過された諸々の媒介項をも包括して觀ると同時に、其等をば想起されたものの根據とする。即ち想起されたものが自らの想起せんと求めてゐた當のものであるといふ明白意識をもつ。故にここでも作用及び自己の意識が、想起の現勢に隨伴し、それを裏付けるのである。

四

然らば、構想と思惟との關係は如何なるものであるか。曩に述べた如く、構想力は、

一方では共通感能と *to einaï* に於て區別されるものであり乍ら、然も實際の活動に於てはそれと一つに癒着して働くと同時に、他方に於ては思惟能力とも、同じ様に區別されつつ一つに相即する。かく機能としては感覺と思惟との中間に成立してそのいづれとも本質的に區別され乍ら、然も實存的には兩者の一方又は他方と一つに活動し、内容的に兩者の内容と生きた聯關をもつ、といふ媒介的位置が構想の特色である。構想は感覺が終つた後も感覺されたものの形相を表象として把持して、それを思惟に材料として提供し、かくして感覺と思惟との双方から限定を受けつつ、兩者の相互限定の場面となる。そのうち、感覺乃至感性知覺と構想との區別及び聯關は吾々の既に見た如くである。故に今や構想と思惟との區別及び聯關が一層立ち入つて見られねばならない。

先づ構想と思惟との區別はどうであるか。構想とは、吾々がそれによつて眞を得或は僞に陥るところの能力又は状態の一つであるといはれ(七〇頁、また、かかる能力のうち、感覺は恒に眞であるのに對して構想は大抵のものは僞であるといはれた(七六頁)。「眞なる構想」(De an. I, 3, 428^b 17, 28) とは、この小論の初めに述べられた如き、構想が感覺されたものの忠實な再生産である場合、「微弱な感覺」である場合である。眼を

閉ぢた時に現れる色の殘像の如き單純なものから、種々なる知覺の極めて複雑な複合態の表象までがこのうちに含まれる。構想が偽である場合は例へば夢に於て起る。夢に於ては、構想能力である限りの共通感能は、外界の客觀からではなくして單に有機體内の運動から由來した觸發を受けて、それを恰も客觀より生起したかの如く誤る (De somniis, 2, 460^b 23)。即ち「單に似てゐるにすぎないものを眞のものであると思ふ (Docketus) (Ibid. 3, 461^b 20) のである。併し夢に於てのみならず、例へば暗がりに物を見た場合や熱病患者に起る幻覺、またアリストテレスの屢、引く例を擧げれば交又された指に挟まれる一つの物が二つに感せられる如き錯覺、又曩に擧げた直徑一呎の太陽の「現象」等に於ても、共通感能⁽¹⁾構想能力である限りの(に偽の構想像が生ずるのである。ただ覺醒時に於ては、共通感能は構想⁽¹⁾への機能ではない本來の機能を、從つて識別又は分別する (aphean) 機能を働かし得る⁽²⁾。而してその際それはより優越的なる感覺に從つて正しく分別する。例へば觸覺に於て二つと感せられたものを視覺に從つて一つであるとは是正することが出来る。之に反して、共通感能の本來の機能の休止が睡りであるから、夢の場合には通常構想の偽から脱することは出来ない。この意味でアリストテレスは言ふ。「根源的感能は一般に個々の感覺によつて言は

れることを肯定する、もし別の一層優越せる感覺が異論を出すのでなければ。如何なる場合でも現象は現象する〔構想される〕⁽⁸⁾。併しそれが如何なる場合でも眞實と思へる〔臆見される〕とは限らない (*phainetai hên oû phainôntas, doksei dé oû phainôntas tò phainômenon*)。尤も、判定する能力が〔例へば睡眠に於ての如く〕羈束されるか又はそれ固有の運動をしない時は別である〔*ibid.* 3, 401^a〕。かく構想像や現象が客觀的實在と十全なる對應をなさず、又は對應する實在をもたぬこともあり得るとすれば、即ち僞なることもあり得るとすれば、そこからまた構想が、思惟のうちで恒に眞なるもの即ち學知 (*ἐπιστήμη*) や叡知 (*νοῦς*) と異なることは言ふ迄もない (*De an.* I, 3, 480^a 10)。故に問題は思惟のうちで、眞でも僞でもあり得るところの臆見 (*δόξα*) と構想との區別である。然るに、臆見には信 (*πίστις*) が伴ふ。臆見するものを信することなしに臆見することは出来ない。併し構想そのものにはかかる信は伴はない。多くの動物には構想があるが、如何なる動物にも信はない。のみならず、信には説得せられること (*τὸ πεισθόδαι*) が伴ひ、説得には理 (*λόγος*) が伴ふ。然るに動物の或るものには構想はあるが理はない。故に、構想が感覺と結びついた臆見や感覺を通しての臆見でもなく、プラトンの考へた如く (*Soph.* 264 A. B) 臆見と感覺との編み合せでもないことは明かである。もしかか

る考へ方をすれば、構想されるとは、本來的に(即ち隨伴的にではなく)感覺するその儘のものを臆見することになるであらう。然るに誤つた形で構想される (*phantasia*) ものに就て吾々が同時に眞なる判断をする場合もある。例へば、太陽は直徑一呎のものに見える (*phantasia*) が、吾々はそれが吾々の住んでゐる地球よりも大きいといふ確信をもつ如くである (*Ibid.* 138^a, 10^b)。以上のことから、構想と思惟、即ち臆見及び學知、叡知等との區別も明かである。

- (1) 睡眠と覺醒とが根源的感覺の *kinēsis* であることに就ては本誌二百十一號八二頁參照。
- (2) 「主宰的感能(共通感能)が分別するのと構想像が生ずるのとは、同じ能力によつてではない」(*De somnitiis*, 2, 460^b 16)。
- (3) アリストテレスは *phantasia* の語源を *phōs* (光) に置つてゐるが、(*De an.* 1, 3, 429^a 3) それが *phantasia* とも結びつけられてゐることは疑に述べた。

併しまた、思惟が構想との聯關なくしては起り得ないことも、曩に述べたことから既に明かである。 *De anima* のうちでは明瞭に「psyche は構想像なしには決して考へない」といはれ (*I*, 7, 431^a 16)、また *De mem.* のうちでも「考へること (*noēsis*) は構想像なしにはあり得ない」といはれてゐる (419^b 91)。その際構想像は「思惟する *psyche* に對し恰も感覺印象の如き役をなす」(*De an.* *I*, 7, 431^a 14)、ただ、それが質料なしである點に於て

感覺印象と異なるのである (Ibid. T. 8, 432^a 10)。のみならず、構想が一種の思惟と言はれ、思惟が一種の構想と言はれてさへ居ることは、曩に述べた如くである (一〇六頁)。然らば思惟は構想像に如何なる仕方に係るか。アリストテレスはそれを説明するに、好んで數學的形像の場合を實例としてゐる。それに従へば、De mem. のうちでは次の如く言はれてゐる。思惟の働きのうちには、恰も幾何學的證明のうちに於てと同じ *πίδοσι* (11) では勿論構想像である) が伴ふ。後の場合、例へば吾々の畫いた三角形が或る限定された大きさであるといふことは決して證明に援用されないが、然も吾々はそれを限定された大きさに畫く。思惟する場合でも同様である。思惟されるものが量的でない場合でも、人はそれを量的なものとして心眼に現前せしめ、然もそれを考へる時には再び量性を度外視して考へる。また、思惟されるものが、本性上、量的なるものの種類に屬し乍ら然も無限定である場合には、人はそれを限定された量として現前せしめ、然もそれを思惟する時には、その限定を度外視して單に量的なるものとして思惟するのである (op. cit. I, 450^a 14ff.)。即ち思惟されるものは恒にひと先づ構想された後更にその構想の限定を *anschauen* して思惟されるのである。今舉げられた後の場合、その本性が量的であるものの場合には、De anima のうちでは、アリストテレ

スが好んで用ひる *le lion* (獅子鼻⁽¹⁾) の例を以て説明されてゐる。或人が獅子鼻であるといふ時、獅子鼻として考へられる限りそれは質料としての肉なしには考へられないであらう。併しそれが凹として考へられる限り、もしも人が實際に〔現勢的に〕さう考へるであらうならば、⁽²⁾凹がそのうちにある所の肉なしに考へたことになるであらう。その様に *le lion* (思惟するもの) は數學的對象を考へる時、質料を離れないものを離れたものとして考へるのである (op. cit. T. 7, p. 31^b, 12ff.)。併し既に同書のうち此の個所に先立つ別の所で、本來量的なる如きものと然らざるものとの兩方を一括して一層立ち入つた解明を與へてゐる。多くの興味ある示唆に富むものである故にそれを引用すれば、次の如くである。「扱て、大きさと大きさの本質 (*to pnythai eivan*) と水と水の本質、水であることとは別であり、その他多くのものに就ても同様であるとすれば、併し凡てのものに於てではない、若干のもの〔例へば、一善、等〕に於ては兩者は同一である、⁽⁴⁾*nous* は肉の本質と肉とを別々の能力でか或は別々の仕方で働く同じ能力でかによつて識別する (*to katanasthai ta katas' exoutri kpane*)。何となれば、肉は質料なしのことはなく、寧ろ恰も獅子鼻の如く、此れのうちの此れ〔特定の質料のうちの特定の形相〕であるから。然るに、*nous* が熱や寒やそのほか肉がそのの或る比 (*logos*) である如き要素

を識別するのは感覺能力によつてである。然らばそれが肉の本質を識別するのは、別の感覺能力とは全く離れたか、或はその能力に對して、恰も折り曲げられた絲が延ばされた時それ自身に對してもつ如き關係をもつ所の能力をもつてである。更に、數學の抽象的對象の場合には、眞直なものは「質料としての」連續を含んでのみある故に、かの獅子鼻の場合に相應する。併し、その本質 (*to ti hyp'ousia*) は、もし眞直であることが眞直なものと異るとすれば、別である。それは例へば「かりにプラトンに従つて」二の性としてもいい。故に nous はそれを異つた能力によつて或は異つた仕方で働く同じ能力によつて識別する。かくして一般に、對象が質料から離れたものであるのに對應して nous の諸能力の間にも區別が成り立つ (Op. cit. I, 429^a 10-22)。勿論ここでは構想力については少しも語られてゐない。併し乍ら、もし前述の如く、思惟作用が構想像なくしてはあり得ず、觀想に於ては必然的に同時に構想像が觀想されるのであるとすれば、ここでもそれを介合せしめて理解さるべきは明かである。而してもし吾々が構想力を入れて考へるならば、今の個所で屢、繰返されてゐる「別々の能力でか或は別々の仕方で働く同じ能力によつて識別する」といふことも、無理なく理解出来ると思はれる。もし構想力を除いて考へるならば、nous が例へば、肉の本質を識

別する他面に於て、肉を詳しくいへば肉の「形相」又は *logos* 即ち肉の構成元素の比的關係を感覺能力によつて識別するといふことは一見奇怪になるであらう。(それ故に、人はこの全文の主語として *hous* の代りに「吾々」を置くのである)。(4) 併し乍ら吾々が曩に理解した所によれば、構想力は一方では根本的感覚能力(共通感能)と癒着してその限り思惟能力から離れ、他方では思惟能力と癒着してその限り感覚能力と離れ、かくして感覚能力と思惟能力とを媒介して、生きた *psychisch* な一體的活動をなさしめるものであつた。構想が一方では感覚でも判断でもないと言はれ乍ら(七〇頁)、他方では「一種の微弱な感覺」であるといはれ(七二頁)、又逆に「一種の思惟 (*nohens*) と見做され得る」といはれるのも (De an. I. 10, 433^a 10)、如上の解釋を裏書きするであらう。實際またすべての構想は感能的構想 (αισθητική φαντασία) か或は思量的又は思慮的構想 (λογιστική φ.) 又は ち *βουλευτική φ.* かであるとも語られてゐるのである (Ibid. I. 10, 493^b 29; 434^a 7)。而して感覺能力と思惟能力とが構想力を媒介として、例へば曩の個所で問題となつてゐた如き、感覺的なるものに就ての分別作用 (*συνετην*) に働く時、この一體的なる活動は、その全體のうちで主宰的である *hous* の名に於て、即ち *hous* の支配に従屬する活動として把握されることも出来るのである。勿論その際の感覺能力とは、特

殊感覺の能力として見られる限りの共通感能ではなくして、それ自身に於て見られる限りの共通感能、即ち種を異にした感覺青と赤の如きや類を異にした感覺青と熱の如きを識別し、また特に空間的形狀運動靜止等を知覺する能力としての共通感能が意味されねばならぬ。然もその上、直ちに構想力と接合し得るものとしての見地に於てである。かくして、*nous*は一方では構想力を媒介として根本的感能力と一體的に働き得ると同時に、他方では單に構想力とのみ結合して、その時の構想力は思量的構想力である(感覺能力から離れ得る。然もこの後の場合に於ても、曩に述べた如く、*nous*はその現勢に於て一度は必然的に構想を使用しつつ然もそれが思惟する限り構想の限定を *ausschalten* して思惟する。即ち吾々はこの場合にも、構想力と一つなる限りの思惟能力の側面と純粹に思惟する限りのその側面とを區別し得るのである。扱て上の引用に於て、感覺的なるもの例へば肉を識別する能力、即ち特定の個物としての或る肉に於て特定の質料と結合する限りの特定の形相 (*forme et forme*。此れのうちこの此れ)を受取る所の、換言すれば、肉の構成元素である寒熱等の比を識別する所の能力は、共通感能である。これは或る見地からすれば、*nous*の主宰の下に隸屬する働きとも見られ得る。同様な例を吾々はアリストテレスの時間論に於て見る

ことが出来る。時間は「前後といふことに關しての運動の數」であつた。然るに「吾々は運動と時間とを同時に知覺する」(Physica IV 11, 219^a 4)。知覺するものは共通感能である。たとへ暗闇のなかでも、psycheのうちにも或る運動が起る場合には時がたつたと思はれるといふのも (ibid. 219^b 3) その故であり、何となれば共通感能は内感の能力でもあるからまた、運動の時間的『前後』が記憶によつて意識され、その前後の『より大より小』が想起を通して意識されるといふのも(九八頁)この故である。(何となれば、かの運動知覺は共通感能の本來的機能であるが、その知覺が Psyche の内面に於て内感としての共通感能を觸發する時、その運動の構想像が生じ、それが再び原運動に關係し還されるのが記憶であり、従つて記憶は「構想能力である限りの共通感能」の機能であるが、想起はかかる記憶の系列に基いて思量的構想に於て爲されるのであるから)。故に nous が「數へるもの」といはれる時、恰も運動の數が運動に刻み込まれてそれを離れず「數へる數」ではなくして「數へられる數」であるといはれるのと對應して、nous もかの共通感能との聯關の下にのみ立つと考へられねばならぬであらう。曩の肉に於ける Logos の識別の場合も同様である。併し同時に、時間の場合に nous が運動を數へるものである限り、運動の知覺に自らを没して仕舞つてはならず、共通感能と一

體の聯關をなし乍ら然もそれとは獨立の能力でなければならぬやうに、後の場合にも、共通感能から離れたものとしても見られ得ねばならぬ。その時共通感能と nous とは別の能力として見られる。識別能力として感覺と *phantasia* と擧げられるのはこの見地に於てである (De an. I, 9, +32^a 15)。故に、其處で肉と肉の本質との識別が「別々の能力でか或は別々の仕方で働く同一の能力でか」といはれるのは、nous がかく共通感能から離れたものとして即ち純粹なる思惟能力 (*νοητικόν*) として見られ得ると同時に、また共通感能と一體の聯關をなすものと見られ得るといふことを意味するであらう。線が折り曲げられた場合とそれが引延ばされた場合との聯關も、ここから明瞭に理解し得る。かく解釋することによつて、この全節は少しも無理なく理解出来ると思はれる。而してこの事は、構想力を中にしての感覺能力と思惟能力との、既に述べられた如き聯關を考へることによつて爲されるのである。(未完)

- (1) これに就ては、後に實體論で述べる。詳しくは例へば *Metaph. E, 1, 25* 等を参照。併しこの例は、邦語に移された場合には適當ではない。何となれば「獅子鼻」は既に「鼻」といふ言葉を含んで居るからである。邦語では、例へば「おでこ」が *frontis* の代りに適當である。それは、凸と同時に、凸と肉(質料)とが一つである額を意味する。

- (2) この読み方は *Hicks, De anima* に依る。

- (3) この場合の「質料」はいふ迄もなく所謂「可想的質料」(*quod non in se*) である。

(4)

ここに引用された全文を通じての主語を nouns とするのは、この文とその前後との關聯から最も妥當であり、希臘の注釋者
 達や Zeller もこれを採る(詳しくは Hicks, De anima, I, 489-490 参照)。Hicks が「吾々」を主語とするのは、肉を識別する
 のが感覺能力であり、従つてそれを nouns に歸屬せしめ得ないと考へたからである。(Oxford 譯に於ける Smith が「吾々」
 を主語としたのも恐らく同様であらう)。併しもしさうすれば、この文の最後の一句 *ο ταυτα τε εστιν ονομα* が既に不可
 解になるであらう。之に反してもし以下に述べる解釋が大過なければ、nouns を主語にすることが可能なるのみならず、寧
 るこの一節の意味を一層よく顯出せしめ得ると思はれる。——尤も、この文では、主語を nouns としても「吾々」として根
 本に於ては大差ない。「吾々」とはここでは psyche に置き換へ得べく、nouns を主語とすることは結局、感覺能力と思维能力
 とを含む psyche の一體的活動をその主宰的能力に歸屬せしめることであるから。

*

*

*

(附記)。雜誌『思想』第百五〇號所載「アリストテレスの方法」のうち藤井謙夫氏は、拙稿「アリストテレスの感性論」(本
 誌第百九號)の一句、「彼は概念の分析と構成とによつて事物の現實へ近付かんとする」(概念的研究所 *λογικῶς οὐκείνῳ*) に對
 して、現象に即してその自然的成り來りと根源とを本質的に説明せんとする「自然的研究」(*φυσικῶς οὐκείνῳ*) を標榜した」
 を取り出し、これに就て、「この對して、なる言葉は、もしそれが『概念的研究』の廢棄を意味するならば、吾々を重大なる
 誤謬に導くのである。上の *επιλογαίς* としての」規定に於ける概念的研究所の精神によつて貫かれてゐないところのアリス
 トテレスの哲學的著作はどこにも存在しない。……我々は彼が『分析論』の著者であり、そしてそれが彼の全著作に對し
 てもつたところ的方法論的意味を無視することばできないのである」と非難してゐる。これだと如何にも私が『分析論』の
 意義を無視してゐるかのやうであり、従つて誰でもが持つてゐる程の哲學史的常識すら持つてゐないことになりさうであ
 る。拙稿の不備は充分自覺してゐるが、これに對しては餘儀なく答辯せざるを得ない。

問題は λογικῶς なる言葉の意義に關係してゐる。それには Ross が簡明な要約を與へてゐるから、それを藉りることに
 する。「*λογικῶς* が示唆するものは truth よりも密に plausibility (Top. 162^b 27) science の反對としての dialectic 或は

sophistic (An. Post. 93^a 15, 474^a Metaph. I 1005^b 22, N 1087^b 20 及び De Int. 17^a 30 参照) 問題となつてゐる事實の精密な nature (474^a も) 寧ろ抽象的考察 (ἀλογία) (の係り) (φουράς, ἀνακρίσις, ἐκ τῶν οὐκῶν ἀρχῶν) に對立す (Phys. 204^b 4, 10, De gen. et corr. 316^a 11, G. A. 747^b 28, 748^a 8, 474^a Metaph. A 1060^a 28 及び ἐν τοῖς λόγοις, A 987^b 31, 1050^b 35 参照) である。通常はその意味は貶黷的 (depreciatory) であるが、要求されるのが抽象的論議である場合には λόγος は ἐπιδείξις (明確なる) というひ得るかも知れぬ。Metaph. M 1080^a 10^a それは多分恒に linguistic な研究又は考察に係る (Ross, Aristotle's metaphysics, II p. 168)。

扱つて (一) 論理的といふことが「一般的なる多義的なる概念の分析によつて個々の事物の定義を樹立しやうとする」如き、ἀνακρίσις を意味せしめられるならば、かかる意味の概念的研究所の精神によつて貫かれてゐない様なアリストテレスの哲學的著作がどこにもないのは、勿論言ふ迄もないことである。故に氏がアリストテレスの方法を「分析的—自然的」として特色付けると同様に、拙稿も、かの引用された個所にすぐ續いて、logos と physis との見地の交叉を敘述の立場とすることを屢々繰返してゐるのであり、また氏の言葉「彼の方法が純粹に經驗的、歸納的として性格付けられる限り、彼の論理的—分析的態度を無視するものである」(拙稿からの引用はこれの例として取られてゐるやうであるが) と同様に、拙稿もかの句のすぐ次の文章に於て、經驗主義との相異に言及してゐるのである。故に拙稿はこの意味の論理的(概念的)研究の廢棄をどこにも意味してゐない。寧ろ反對に論理的見地と自然的見地との二重の契機に立つといふ意圖を強調的に言表してゐるのである。(勿論この意圖がどこまで成功してゐるかば別問題であらうが)。

(二) 併し λόγος は他方 ἀνακρίσις にも對立して惡しき意味での「概念的」又は「抽象的」態度をも表示する (Ross からの引用参照)。私が用ひたのはこの意味に於てであつた。引用された拙稿の個所は、哲學の全體的態度、體系そのものの立場を問題とし、アリストテレスの立場と通常の合理主義や經驗主義との區別に言及した所である。然るにかゝる全體的地位を表示する λόγος が depreciatory な意味をもつて、特にプラトンやプラトン主義者への批評に用ひられてゐることは (例へば Metaph. A 1060^a 28, [λόγος に探究することによつて]、周知のことであり、藤井氏の論文にも觸れられて

ぬることである。例へばヘーゲルが *Verstand* や *Reflexion* を自己の方法に契機として取り入れ乍ら、他方カントやフイヒテの哲學を *Verstand* の立場 *Reflexion* の立場として批評してゐるのと同様な事情である。かゝる事情は拙稿の上にも、讀者を「重大な誤謬に導かない程度には表はれてゐる。そして、あそこではそれだけで充分であつたのである。(それ以上立ち入つたことは、私にとつては、實體論と論理學を取扱ふ時の問題であつた)。
 のみならず、氏の批評に於ては、かの一句が前後の聯關から取り出され、「もし………廢棄を意味するならば」との假定を負はされ、然もその假定を事實として、難ぜられてゐる。私も恒に氏の諸論文から多く教へられてゐる一人であるが、併し少く共この非難に於ては氏が甚しく *critisch* であり、従つて(氏の擧に倣へば)「*negativ orientir*」を *positiv orientir* したることによつて復讐された」と考へる。